イギリスと日本の中学生は どのような思春期を過ごすのか？

エミリー・エーモット 博士
森田 理仁 博士

イギリスと日本の中学生はどのような思春期を過ごすのか

世界にはたくさんの異なる社会や文化が存在していますが、どこで産まれ・育ったかに関わらず、子どもから大人に移行する期間は人生の中で最も重要な発達段階の一つといえます。イギリスのロンドン大学（ユニヴァーシティ カレッジ ロンドン）のエミリー・エーモット博士と東京大学の森田理仁博士らは、さまざまな文化で暮らす10代の若者の思春期において、“自分にとって大切なもの”は何かを調査しています。研究チームはイギリス（イングランド）と日本の13歳〜15歳の中学生に日々の暮らしや考えを表す写真を一週間撮影してもらい、彼・彼女らの社会環境、そして思春期がそれぞれの文化においてどのように形成されるのかについて研究を続けています。

研究の専門用語

思春期 – 性成熟が始まり、完成し、身体的成長が止まるまでの期間。子どもと大人の間で、広く10歳〜20歳ぐらいを含む。

文化 – 特定の集団の人々による慣習、信仰、習慣、芸術、そして社会的振る舞いの総称。

社会性 – コミュニティにおいて他者と関わる個人の能力。

進化 – 生物の性質が世代の経過とともに変化する過程。それぞれの環境で生存と繁殖を有利に行うことができる性質が次世代に広まっていく。

思春期は私たちの人生の間で最も重要な期間の一つです。子どもから大人へと成長することに伴い、私たちは身体的な変化や、役割・責任の変化、そして共に時間を過ごす人の変化など、常に多くの変化に直面するようになります。同時に、大人に近づいていくほど周囲の人々が自分のことをどう思っているのかにも敏感になり、私たちの行動や発達を形作っていきます。しかしまず第一に、今日に至ってもなぜ我々人間に思春期が存在するのかは十分にわかっていません！

思春期は人間だけにあるものではありません。多くの動物が自然界で似たような段階を踏むことから、生物学者の中には思春期を、生物が成長し生存と繁殖を行う上で必要な能力を与える期間であり、そこには進化的な有利性が存在すると考える者もいます。人間の生物学的特徴や人類の進化を研究するロンドン大学のエミリー・エーモット博士と東京大学の森田理仁博士らは、イギリスと日本の若者の思春期の類似点と相違点について調査しています。

異なる文化での思春期の研究から何がわかるのか？

私たちの祖先を含む人類はこれまでに世界中であらゆる文化を発展させてきました。産まれ・育った文化が個人の考え方や感じ方に大きな影響を与えるにも関わらず、私たちは生物としては皆同じ人間（ヒト）です。特に若者の行動については、どこで産まれ・育ったかに関わらず多くの類似点が存在します。「どの社会にも何らかの形で思春期がある」とエーモットさんは言います。「共通している特徴は、恋人（彼氏や彼女）と付き合うことへの興味、まだ知らないことへの興味、新しいことへの挑戦意欲、家族より友人たちと過ごす時間が増えることなどです」

エーモットさんは異なる文化の思春期を比較することで、この初期の成長段階が私たちの人生においてどれほど重要で、今後の成長にどれほど影響を与えるのかを、より深く知ることができるのではないかと考えています。どの文化を比較してもおもしろそうですが、エーモットさんは特にイギリスと日本の10代の若者に絞りました。これは彼女がイギリスと日本のハーフであり、どちらの国にも多くの知人がおり、どちらの文化に対する理解もあったからです。共同研究を通して、エーモットさんと森田さんは「2つの国の10代の若者にとって思春期が実際にどのような意味をもつのか」という興味深い研究を進めています。

データの収集方法

研究チームは、「誰と遊ぶか」「誰と話すか」「どんな人からサポートを受けるか」「どんな人と仲良くし、どんな人を嫌うか」など

エーモットさんと森田さんらの研究は、以下の大学に所属する研究者による国際共同研究です。
ユニヴァーシティ カレッジ ロンドン
ロンドン大学公衆衛生熱帯医学大学院
東京大学
上智大学
弘前大学

の若者の社会生活についての疑問を中心に調査することにしました。そしてこれらの情報を集めるためには、「10代の若者に自ら能動的に研究に参加してもらうこと」「普段から行っているように、自分にとって大切なものの写真を撮影してもらうこと」が最も適していると考えました。

この研究のために、日英の研究者はイギリスと日本の中学生にそれぞれ約一週間の間、日々の暮らしの中で写真を撮影してもらうようにお願いしました。参加してくれたのは13歳〜15歳の中学生（日本では中学二年生〜三年生、イギリスではYear 10）で、撮影してきてもらったのは“自分にとって大切なもの・人・場所”です。エーモットさんは、「中学生の生活に一番詳しいのは中学生自身です。なので私たち研究者にとって重要だったのは、中学生にとって大切なものは何かを、仮定や推測で決めつけないということでした」と言います。

どのような発見があったのか？

集めたデータからは多くの新事実が発見されました。写真を分析していく中で、両国の若者の生活に対してより広い理解を得ることができたようです。中学生の彼・彼女らは、友達や家族、ペット、趣味、そして自然など共通のものを被写体として写真を撮影していました。集まったデータは当初から想定していた通り、思春期が両国において個性やスキルを磨く上で極めて重要なものであり、また家族や友人、広いコミュニティーとの結びつきを強めるためにも必要不可欠だということを明らかにしました。

それと同時に、研究者は調査が始まったときには予想もしなかった両国の違いにも気が付きました。「イギリスの生徒の多くは、自然の重要性や、ペットが大切な家族の一員であるということを伝えてくれました」「日本の生徒は、今の自分にとって大切なものだけでなく、過去や将来についても深く考える傾向にありました」とエーモットさんは言います。

イギリスと日本の思春期の類似点や相違点が少しずつわかってきたので、近々学術論文として成果を発表できるように作業が進められています。しかし、論文が発表された後もこのプロジェクトにはさらに研究しなければならないことが山のように残されています。研究に終わりはありません。

調査は今後どのように役立てられるか？

研究チームはすでに、イギリスと日本の思春期の特性をさらに調べるために次の研究も開始しています。ロンドン大学でエーモットさんが指導している学生は、ロンドンに住む16歳〜18歳の若者が「女性であること（フェミニニティ）」に対してどう思うのかを調査をしています。また、東京大学の学生は友達や学校が女子のスポーツ参加にどのような影響を与えるのか研究しています。

もとより、日本とイギリスは世界中にある文化のうちのほんの一部に過ぎません。エーモットさんと森田さんらのチームは将来的に、その他の国々の思春期がどのように形成されるかという研究にまで手を広げようとしています。さらにプロジェクトを拡張させることで、人々がどのように子どもから大人へと成長していくかについてのより詳細な全体像を知ることができるようになるかもしれませんし、もしかすると、そもそもなぜ思春期が存在するのか？という進化の謎の答えも見つかるかもしれません。

エミリー・エーモット 博士
(Dr Emily Emmott)
ロンドン大学
（ユニヴァーシティ カレッジ ロンドン）
人類学専攻

研究分野
自然人類学

研究費
ESRC-AHRC UK-Japan Connections Grant (ES/S013733/1)

森田 理仁 博士（もりた まさひと）
東京大学
大学院理学系研究科 生物科学専攻

研究分野
人間行動の生物学、人類の進化

研究費
文部科学省 科学研究費補助金
(JP17H06381)

自然人類学という研究分野について

人類学とは私たちを人間たらしめるすべての物事を研究する学問です。自然人類学（生物人類学とも呼ばれます）は、人体、行動、生態、心理、文化、今は絶滅した人類の先祖、進化の系統樹上人類に近いその他の霊長類のなどを対象とし、扱う範囲はとても広いです。チャールズ・ダーウィンの進化理論から最新の心理学に至るまで、数多くの研究によって自然人類学の知識は構成されています。

自然人類学の研究は、発掘調査で見つかる有史以前の人間の骨を調べる生物考古学や、私たちの心がどのように進化の過程の中で形作られてきたかを研究する進化心理学にまで及びます。また、人間の体や行動の仕組みを研究する解剖学、生化学、遺伝学といった分野においても重要な役割を担っています。

自然人類学を学ぶやりがい

自然人類学という分野がこれほどまでに多様な範囲を持つからこそ、研究するのが楽しいとエーモットさんは言います。古代の狩猟採集民についての本を読んだ翌日に、現代社会での思春期の間の脳の発達についての本を読み、そのまた翌日にはマーモセット（中南米に生息するサル）の生態についての本を読むなんてこともあり得ます。

多くの分野にまたがる学問なので、自然人類学の研究対象が特定の狭い事柄だけに限定されることは滅多にありません。それどころか、時には新しい発見のためにもっている知識を総動員したり、他の研究者と協力することで課題の解決に取り組みます。研究を通して、多種多様な社会や文化に暮らす世界中の人達と関わることができるチャンスもあります。

今後の研究課題

多くの分野の研究者が集まるがゆえに、互いの研究分野のことを詳しくは知らない専門家同士がうまく協力しなければならない状況も多く訪れます。なので一連の作業を上手く取りまとめ、効率よく結果を得ることができるように調整できるようになることも大切です。

自然人類学者を目指す人にとって必要なのは、馴染みのない文化に対する寛容さ、自分がまだあまり知らない分野の専門家から積極的に学ぶ姿勢、そして国際的な大人数の集団の中で成長しようとする心構えです。エーモットさんはまた、「多くの自然人類学者は他の自然科学系（例えば生物学や化学）の研究者と共同研究を行うことがこれまでの主流でしたが、歴史や文化が人類学の非常に重要な側面の一つでもあるので、現在は人文社会科学や芸術系の研究者とも協力することが求められます」とも言っています。自然人類学が自然科学の垣根を超えて文理融合的に拡大していくための新しいアプローチを見つけられるかどうかは、未来の研究者次第なのかもしれません。

勉強に対するアドバイス

日本の大学では、自然人類学のコースは理学部の生物学科や医学部の中に設置されていることが多いです。
エーモットさんは、自然人類学は多くの分野にまたがりますが生物学がベースになっているので、学校では生物学の授業を取ることを勧めています。日本でも同様の面はありますが、大学入学後に新たに勉強することが可能な場合もあります（各大学のカリキュラムによります）。そして、地理学、社会学、心理学、数学なども人間の社会を理解するための助けになることでしょう。自然人類学の研究者は世界中で調査を行うこともあるため、他国の言語の習得が役立つことも多いです。

自然人類学を研究するには

・日本で自然人類学を研究できるコースはあまり多くありませんが、東京大学（http://www.bs.s.u-tokyo.ac.jp/~jinrui/index.html）や京都大学などに研究の拠点があります。
・『人間の本質にせまる科学：自然人類学の挑戦』（井原泰雄他編・2021・東京大学出版会）は最近出版された教科書です。http://www.utp.or.jp/book/b555761.html
・関連する国内の学会としては、日本人間行動進化学会（https://www.hbesj.org）、日本人類学会（https://anthropology.jp）などがあります。
・エーモットさんが所属するロンドン大学人類学専攻では、学生のためのイベントや活動、サマースクールなどを運営しています。英語のサイトですが参考にしてみてください。https://www.ucl.ac.uk/anthropology/

エーモットさんはどのようにして自然人類学者になったのか？

「私は幼い頃から芸術や創造的なものが大好きでした。また、世界の仕組みにも興味がありました。まさか自分が自然人類学者になるなんて思ってもいませんでしたが、科学と創造性を組み合わせる今の仕事は私にとってまさに天職だったのかもしれません。

今まで科学者になりたいと思ったこともありません。ただ、好きなものを追い続けていたらある時、大学での講師だったり研究者になっていたのです。仕事として自分の興味を追い続けられる私はきっと幸せ者なのだと思います」

「共同研究やたくさんの人たちと共に働くことは、私にとってとても有益なものです。チームメンバーを支え、そしてチームメンバーに支えられるということは同時に、チームがうまく機能しているということでもあります。

何か間違いが起こった時に一人で抱え込みすぎないことが大切です。誰かとしゃべったり、誰かとちょっとした休憩を過ごすこと、犬と散歩に行くことなんかも私の支えになりますね！」

「今に至るまで私は多くの人に支えられ、少しずつ前に進んできたので、最も嬉しかった瞬間というものを選ぶことは難しいです。ただ一つ、とても誇りに思っているのは、私が企画し、ロンドン大学人類学専攻で講師を務めている『子育てへの生物社会学的アプローチ』という講義です。その講義は、異なる文化における幼児期から思春期の子育ての方法の違い、またそれが成長にどのような影響を与えるのかを理解しようとする私の研究に由来しています」

エーモットさんからアドバイス

1. 興味のある分野を見つけてください。研究者になるためには、新しいことを吸収し続けなければなりません。ですので、学んでいて楽しいと思える分野を探してみましょう。
2. 失敗を恐れないこと。前進するために必要なことは、次どうすればよいかを考えることです。
3. 研究する上でうまくいかないことは多々ありますが、何が原因かよく見据え次にいかすことこそが成長の鍵です。

森田さんはどのようにして人間行動学者になったのか？

「私が高校で初めて生物の授業を受けたとき（当時15歳）、先生がリチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子』という本を紹介してくださいました。動物のさまざまな行動は、その生存や繁殖にとっての有利性から理解することができるのではないか、というシンプルな理論に当時強く感銘を受け、その時覚えた興奮が今日に至るまで生物学への興味を掻き立てています」

「研究する上で必要になるさまざまなプロセス（研究計画の立案、データの収集、データの分析、結果に対する考察、論文の執筆と改訂、そして最終的な研究結果の発表）は時に非常に困難な作業ですが、同時に楽しいとも感じます。例えば今回の『思春期の社会性』のような、多くの共同研究者や調査に協力してくださる方々と一丸となって取り組むプロジェクトは非常におもしろく、やり甲斐があります」

「私はもう10年以上、進化の観点からヒトの行動について研究していますが、最も印象的だったのは大学学部生の時の初めての研究です。私は大阪の駅で行き交う人々を観察していました。初めは上手くデータを取ることができませんでしたが、少しずつ慣れてきてできるようになり、そしてある時ふと“観察している人々やその場所の理（ことわり）”を少しだけ理解できたような不思議な感覚を味わいました」

「ヒト以外の動物の行動の研究では、研究者はよく自然な条件のもとでの野外観察を行います。しかし、こと人間に関しては倫理的な問題を含む理論上・方法論上の理由からそのようなアプローチは多くの場合困難です。そこで、中学生の日々の暮らしや考えを彼・彼女らに撮影してもらった写真を通して理解するのがよいだろうというアイデアに至りました」

「現在、多くの（若手）研究者は非常に難しい状況に直面していますが、私は幸運なことにたくさんの人たちのおかげでずっと研究を続けることができています。それが私の誇りといえば誇りです。最近、新たにいくつかのプロジェクトをスタートさせました。しばらくはこのプロジェクトを精一杯楽しもうと思っています」

森田さんからアドバイス

皆さんが今経験している、そして将来経験する“ワクワク”を大切にして、そして追求してください。それらがあなたの人生を豊かにしてくれるかもしれません。

‘研究プロジェクトのメンバー
- 東京でのワークショップにて’
by 思春期の社会性プロジェクト,
2019 CC BY-NC 4.0

思春期の研究についてさらに理解を深めたり、議論したいと思った人のために

研究のまとめ

基礎

1. 思春期の主な特徴は何でしたか？
2. 思春期と幼年期の主な違いは何だと思いますか？
3. どのような根拠があって研究者は、「思春期が進化的に重要な役割をもつ可能性がある」と考えているのでしょうか？
4. エーモットさんと森田さんらの研究で、中学生がよく撮影していたのは何の写真でしたか？
5. エーモットさんと森田さんらは、イギリスと日本の中学生が撮影した写真にはどのような違いがあると考えたでしょうか？
6. データを集めるために、なぜ研究チームは中学生自身に日常の写真を撮影してもらう方法が適切だと考えたのでしょうか？

応用

7. 2つの異なる文化に暮らす若者によって撮影された写真を比較するためには、どうしたらよいと思いますか？
8. 中学生が撮影した写真から、思春期の特徴であるリスクを伴う行動（risk-taking behaviour）について詳しく調べるためには、どこに注目するとよいでしょうか？ホームページの写真を見て考えてみましょう。https://www.adolescentsociality.com/photos
9. 異なる文化で育った人が、異なった思春期を過ごすと考えられるのはなぜだと思いますか？
10. 世界中の異なる国々に住む中学生が撮影した写真に、共通して登場するものは何だと思いますか？また、あなたは世界中の文化に詳しいですか？異なった文化圏に住む中学生の写真から何がわかると思いますか？

実践編

- もし興味と機会があれば、この研究プロジェクトに参加してくれた中学生のように、一週間“自分にとって大切なもの”の写真を撮影してみましょう。撮った写真を見返した後、何度も登場する被写体があったら書き出してみましょう。他の人と比べてみたり、もし研究者がその写真を見たらあなたの思春期をどのように分析すると思うか考えてみましょう。

- エーモットさんによる、自然人類学と青年期にまつわる講義を見てみましょう（英語なので難しいかもしれません）。mediacentral.ucl.ac.uk/Player/3A4BA2i1

最後に

- この研究プロジェクトについてもっと詳しく知りたいと思った方はホームページを見てみましょう。https://www.adolescentsociality.com

エーモットさんの連絡先は emily.emmott@ucl.ac.uk です。

森田さんの連絡先は mmorita.human@gmail.com です。「気になることやリクエストがあれば、どんなことでもお気軽にご連絡くださいね！」by 森田さん

日本とイギリスの中学生によって撮影された写真

In 埼玉 - 日本 'Our school corridor (私たちの学校の廊下)'
by Kookie, 2019 CC BY-NC 4.0

In デヴォン - イギリス 'Ready Steady Go
(位置について、用意、どん)' by Paul Griffin, 2019 CC BY 4.0

In 東京 - 日本 '救い (Salvation)'
by Ema, 2019 CC BY-SA-NC 4.0

In ロンドン - イギリス 'English poetry (英語の詩)'
by Dee, 2019 CC BY-NC 4.0

In 青森 - 日本 '岩木山3 (Mt. Iwaki 3)'
by 匿名 (Anonymous), 2019 CC0 4.0

In ロンドン - イギリス 'The Maze (迷路)'
by Saffron Verdant, 2019 CC BY-SA 4.0

日本での調査に協力してくださった学校
東京大学教育学部附属中等教育学校、上尾市立東中学校、
弘前市立東目屋中学校、弘前市立裾野中学校、他一校

futurum
Inspiring the next generation

WWW.FUTURUMCAREERS.COM

TEL: +44 117 909 9150

EMAIL: INFO@FUTURUMCAREERS.COM

UCL

科研費
KAKENHI

Evolinguistics